

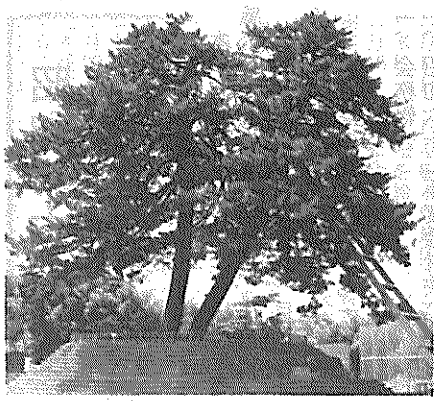
双松会会報

第9号(「双松」通巻14号・「松高北高同窓会報」通巻第15号)

特集

二本松への訣別と新生 竹下氏首相に就任

発行 松江市奥谷町164
島根県立松江北高等学校内 双松会事務局 TEL ④4888・④0655
印刷 有限会社 高浜印刷所 TEL ④3000



ご挨拶

会長 柴田 午郎



二本松の松喰虫による枯死伐採事件は、われわれにとって生涯の痛恨事でありました。本号に於てその詳細をご報告致しますので、会員諸賢も何卒ご理解いただきたく思います。しかし大切なものは現在残っている一本のことです。何分島根県は松喰虫にとつて、大へんに住心地よい土地らしく、今年の夏も蔓延も決して油断出来ないであります。学校当局でも、専門家の指導の下に万全を期して居られますが、何とか効果のある対策が実施出来るように協力する外はありませぬ。

さて松江地方に住むわれわれが、この頃何ともしも放っておけないと思うのは、中海干拓湖淡水化の問題であります。何分すでに中海には莫大な費用を使って水門が完成している現在、その経済的負担、建設、農水等関係官庁の面目問題等、歯車は緩慢ながら、一歩一歩実現に向って進行している、と



二本松と私

校長 目次 健一

狙撃つを極めたとはいえ、松くい虫禍から二本松を守れなかったことは、今もなお、心が痛む。

本校への転勤辞令を受けたとき、並居る教育庁の幹部の皆さんの前で、私は「二本松を枯らさないようにする」と明言した。歴代の先輩校長先生方が二本松には大変な神経を使っておられたので、現実には二本松が枯れるなどとはその時全く思ひもしなかつた。それに実はその言葉に、私は自分なりの思いをこめていたのである。その思いの文を書けば長くなるが、一言で言えば、私にとって二本松とはやはり赤山教育の代名詞であつた。松中以来一〇〇年の歴史の証人とも思ひ、何にもまして母校と青春への熱い思いをかきたてるものであつたから、私はその言葉に、輝かしい北高教育の

細なことは別として、いよいよお国の為には竹下首相のご健闘を期待するものであります。

先般当会副会長の森脇善夫氏が死去せられました。氏は中学時代に私より一級若い秀才で、久しく山陰合同銀行の役員を勤めて居られました。私は個人的に特に親しくしてましたので、いまさらながら次々と友人の少くなるのを淋しく感じます。いずれ近日常に手段を経て、後任の方をお願いするにお願いして、若い会員諸賢からお願いしていただければ顔を整えたいものであります。

今年の冬は意外に寒い間が長く、氣候不順でありましたが、漸く新緑も濃くなり、やがて初夏、会員諸賢の一層のご健康を祈ります。

附記 宍道湖淡水化の問題は、その後平田、斐川を除く市町村が一延期を求め、県もそれに応じない結論を出し、鳥取県も同調、農水省もこれを認めて、淡水化問題は環境保全を願う住民側にとって、逆転勝利の形で一応決着しました。…と新聞も報じて居ります。私もほっと胸をなでおろして居ります。

新装なった野球場 予算のついた 陸上グラウンド

野球場がきれいになった。以前南東に向いていたバッターボックスは、九十度位置をかえて、北東に向かつて撃つことになりました。念願であった、盲排水工事と盛土はできなかったが、グラウンドの表土を剥離して、新しい真砂土を入れ整地を行い、内野には黒ぼくを入れた、きれいなフェンスが張られました。ヘルン旧居から西に直進する都市計画道路がグラウンドの中央を突き抜けたのは四月初旬でありました。昭和四十九年に認定されていた、北堀・黒田線都市計画道路工事と、四十間堀に続く中川河川の川幅を十七・五米に拡張、さらに幅四米の堤防をつくるための補償工事として野球場は改装されました。

この工事に先立って、昨年四月に着任した、目次校長は長年の懸案になっていた排水の悪い第二グラウンドの整備に早速着手、八月には、双松会・紅陵会・PTAの三つの母体から構成された「松江北高第二グラウンド整備促進協議会」(会長兼折博ほか十名)を結成して、九月には県へ陳情の働きかけを行いました。…グラウンドへの正式進入路ができるのを機に、盲排水等の排水設備を施し、盛土を行って、陸上競技場ならびに野球場としての本格的な整備、四周のフェンス、野球場のバックネット、横断道(信号機共)等の安全防護施設、河川拡幅にもなつて使用不能となる硬式テニスコートの代替地の確保」が主たる内容でありました。

また、十月末には黒田地区自治会の方々にお集りいただき、促進協・県・学校も混えて話し合いを持ちました。野球場の整備に関しては道路の南側でもあった了解が得られました。北側の陸上グラウンドについては、民家に隣接していることもあって、具体的な設計図を見てからということになっているのが現状です。

幸いに県からは暖かい御理解をいただいております。如何にして排水をよくするかの現在設計中であり、テニスコートの代替地も未解決の事項であります。

松くい虫

ユーモアであつたはずのこのコラム欄で二本松の松くい虫被害について書くことになつたのは、考えてもみないことであつた。本来は松のマガラカミキリに対する封じ込みの意を込めて名付けたものであつたに違いない。▲質実剛健のシンボルであつた二本松も必死の防除にかかわらず西側の一本が樹令二百十六年にしてその生命を絶つた。▲伐採は、二本の松を運ねていたワイヤーを取りはずし、枝を全部切り落して、全く幹ばかりになつた松を、上から徐々に四つに切つてクレインで吊り上げていった。最上部分から順に三・六四米、三・〇八米、四・七五米、六・九三米、全長一八・三七米、重量一・三三トンの根元の最大径一・二四米であつた。松の切り口からは松脂は全く出ず、中心部の赤味の部分を除いて、その外周部は青黒く色をなし、しみとなつていた。これが松くい虫特有のカビだそうである。▲県林業試験場の周藤博士のお話によると、日本における松くい虫の初被害は明治三十八年、長崎県に発生したことはじまる。山陰地方では戦後の二十三年、四年頃と、三十年代の後半から四十年代の前半にかけての二回の大きな被害がある。特に後者の方はそれ以降現在までその勢力は衰えることなく引き続いていていられる。▲その被害が大きくなつてい

原因の一つに、被害木の処理が確実になされず放置されていることにある。戦後二十三年、四年当時、山に入る手が不足していたこと、三十年代後半からは灯油・プロパンガスが新に代る燃料として登場してきたことにある。▲その点二本松はもう一本の健全木への被害を防ぐために早い時期に伐採に踏み切つたわけである。▲本年もまたマガラカミキリの活動はじめる季節に根の調査を行った。根も元気がよく、土質も悪くなく、水はけも良いようだ。五月には第一回目の消毒も行った。なんとしてももう一本の松は守らなければならない。



昭和六十三年 第一回役員会開催さる

本年度第一回役員会は、約八十名の出席者を得て去る六月七日に一文字屋ホテルで開催された。

- 一、会務報告
二、昭和六十三年度決算報告
三、監査報告
四、名簿会計決算報告、監査報告
五、役員改選
六、昭和六十三年度予算審議

- 昭和62年 役員会(一文字屋ホテルにて)
6月22日 役員会(一文字屋ホテルにて)
・会務報告、昭和61年度決算報告、昭和62年度会計予算審議、会則改正、役員補充、名簿会計中間報告、各期代表90名出席
8月1日 会報発行、発送
10月23日 双松会役員会(北校校接室)
13名出席
10月25日 東部双松会(安来市民会館)
10月29日 双松会発起人会(北高広接室)
15名出席
11月4日 双松会役員会(一文字屋ホテル)
70名出席
11月20日 竹下総理東京事務所訪問
兼折副会長・景山幹事長・諏訪幹事
11月21日 東京双松会(日本クラブ)
兼折副会長・景山幹事長・学校長・庄司・安田
80名出席
11月27日 近畿双松会(弥生会館)
兼折副会長・景山幹事長・学校長・奈良井・庄司
90名出席
11月28日 双松会役員会(北高起雲館)
50名出席
12月12日 二本松別新式(松江北高)
千五百名出席
昭和63年
1月18日 双松会役員会(一文字屋ホテル)
21名出席
2月13日 二本松斧入れ式
150名出席
2月14日 米子双松会(米子ホテル)
学校長・庄司・安田
60名出席
3月8日 双松会入会式(卒業生352名)

双松会役員

- 会長 柴田 午郎 44期
副会長 能義郡伯太町東母里四八三
境港市渡町二二二八
兼折 博 52期
浅野 務 60期
井戸内 正 65期
松本市菅田町五七
高一期
松本市新羅賀町二二二
高二期
松本市末次本町四五
高三期
目次 健一 66期(学校長)
松江市奥谷町一六四(北高内)
高二期
幹事長 松江市千鳥町六四
副幹事長 田中 征二郎 高三期
監事 山崎 栄一 67期
松江市黒田町四九四一七
高二期
難波 靖
松江市奥谷町三三三
高二期

会則改正

第5条 幹事 若干名(内幹事長一名)
第6条 副幹事長一名、常任幹事若干名
第7条 幹事長、副幹事長、幹事、監事は総会において選出する。幹事長、副幹事長、事務局長は会長が委嘱し、常任幹事は幹事の中から会長が委嘱する。
第12条 常任幹事会は会長、副会長、幹事長、副幹事長、常任幹事、事務局長をもって構成し、会長がこれを招集する。
附則
本会則は昭和54年5月23日から施行する。
昭和62年6月22日一部改訂。
昭和63年6月7日一部改訂。

昭和62年度双松会会計決算書

Table with columns: 収入総額, 支出総額, 収支差額. Rows include 収入 (人會金, 雑入金, 雑出金, 雑収入) and 支出 (会議費, 印刷費, 通信費, 記念品費, 雑費, 雑出金, 雑収入).

昭和63年度双松会会計予算書

Table with columns: 収入, 支出. Rows include 収入 (人會金, 雑入金, 雑出金, 雑収入) and 支出 (会議費, 印刷費, 通信費, 記念品費, 雑費, 雑出金, 雑収入).

通信制あれこれ

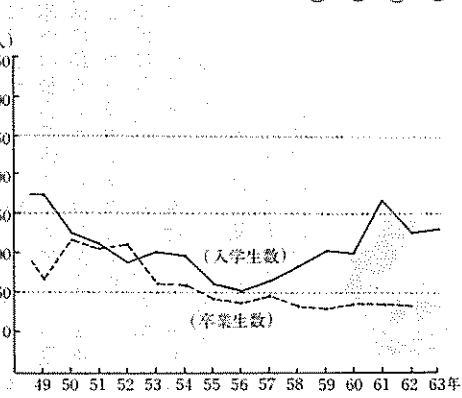
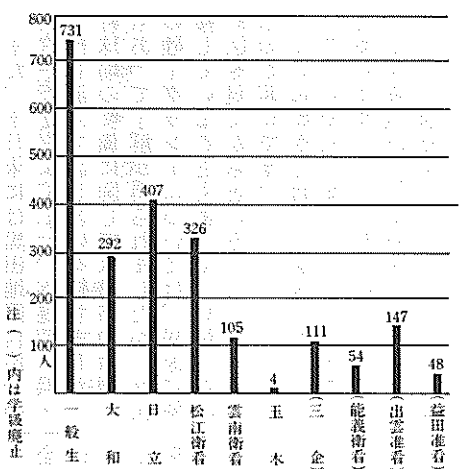
事務局 坂本育穂

最初から突然ですが「地域同窓会補助」についてお知らせをさせていただきます。
「地域同窓会補助」は、単一の同窓会について同一年度一回に限り、出席者10名以上は、一万円、それ以下は五千円とする」という内規がありますので、どんな形でも良いですから同窓生が相集って会を開かれる場合は事務局へ一報ください。なおその際は、会の内容報告、出席者氏名、記念写真を送付してください。
例年この欄をお借りして役員会報告をしておりますが、今年の特集号でも発行期も早まるというわけで、

7月17日に予定されている今年度の役員会報告ができません。よって今回は心にゆとりよくしなごころをそこはかとなく書きつくる次第です。
さて、通信制課程の卒業生総数ですが、第一期が昭和33年3月卒業の和田義孝さんで、そのざっと30年後の今年、雲南衛看卒業生の吉田由美子さんが二二五番目となります。
和田さんの時はたった一人の卒業生でしかも全日制と一緒に卒業式でした。この時のことを和田さんはこう述べています。

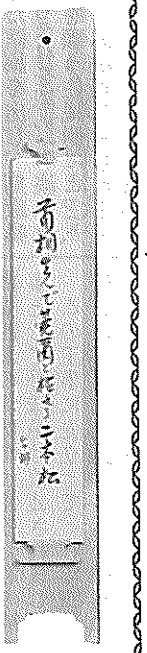
「六〇〇名の全日制の卒業生に交って通教卒業生唯一人の私、卒業証書受領に立上った時、期せずして起った拍手とすすり泣き、あの時の感激の瞬間は今も忘れられません。
こうして9年を要して卒業された和田さんも遺憾なく10年前に他界されました。続いて第二期、第三期も卒業生は一人ずつでしたが、第三期の森山さんも物故されており、卒業証書番号88番の私もそろそろ人生のはかなさを感じてこの今です。
なお今日のように通信制独自の卒業式が挙行されるようになったのは、卒業生数がそれまでより倍増の一一九名となった昭和47年からのことです。

5年前にも書きましたが、区分別のグラフをまた次に示しておきましょう。男女別を調べてみますと女性性は男性の2倍になります。
毎年、県下の諸機関並びに同窓会の皆様にも生徒募集をお願いしています。本年は新入生二二九名(一般生60名、集団生69名)、転編生52名、計181名の入学生となりました。左の図でお解りと思いますが、卒業数は漸減、入学生数は漸増といったところでしょうか。
最近の入学の動向をみますと、一般生、転編生の増加が目立ち、集団生は



「二本松」記念品をお分けします

伐採した「二本松」から、表札と短冊懸を作って、記念品として実費でお分けします。
この会報に同封した注文書(葉書)によってお申し込み下さい。代金は品物に同封する振替でお送り頂きます。
右の写真の短冊は柴田会長の川柳一首相生んで完爾と枯れる二本松(直筆)です。
(但し、記念品には含まれません。)



最後の昨年末に行われた双松に關する募金についてですが、通信制同窓会の皆さんからは30数万円の募金をいただき、中には大枚一万円もの寄付をした方もあったりで、学校長を始め、双松会事務局も大変な感激だったことをお伝えしておきます。
何かの節目に全体総会を開きたいものですが、財源の少ないのが同窓会ではなかなか困難な状況です。しかし何かは必ずや同窓諸氏、肩を並べ、苦しかった、あるいは楽しかった通信教育の学生時代を語り合いたいものです。今後ともよろしくご支援の程をお願いします。

特に衛生看護科の入学生が少なくなり、学院が入学募集の停止を行っているのが2年後には残念ながら在學生がいなくなり、松江衛看も入學生が1けた台ですので今後どうなるのでしょうか。
古い卒業生の皆さんに耳新しいと言え、59年から松江の玉木建設、61年から同じく松江のタプチ学園の集団学習が開始されたことでしょうか。(もう5年も経って耳新しい、とは不都合な言い草ですが、お知らせの機会がなかったのをお許しください。)
本年度の通信制の教職員スタッフは専任28名で、退任された塚本教頭の後を受けた石倉新教頭の下に、本校スクーリング、集団出張授業、月曜スクーリング、本校での集団生授業、リポート添削、各種行事(予せん会も今はなくなり、キャンプも隔年開催ですが)等々について、後輩諸君の指導に張り切っております。
最後に昨年末に行われた双松に關する募金についてですが、通信制同窓会の皆さんからは30数万円の募金をいただき、中には大枚一万円もの寄付をした方もあったりで、学校長を始め、双松会事務局も大変な感激だったことをお伝えしておきます。

特集

二本松訣別・新生式

経過の概要

10月21日 いよいよ松の病状悪化のため急いで双松会幹事200名の方々に「二本松、松くい虫被害について」と「二本松、松くい虫対策と経過報告」を送る。

双松200年の歴史を閉じる

11月10日 役員会の決議に従って「二本松訣別・新生全国大会」の案内状、「新生全国大会」の案内状、「募金趣意書」を全

二本松訣別・新生式

日時 昭和六十二年二月二日十四時
場所 松江北高等学校二本松下

式次第

- 一、開式の辞
一、「赤山健児の歌」斉唱
一、経過報告
一、訣別の辞
一、新二本松植樹
一、詩「木霊よ」朗誦
一、二本松継承のことば
一、校歌斉唱
一、閉式の辞



二本松斧入れ式次第

昭和六十二年二月三日(土)
九時~九時三十分
伐採 十時~

- 一、着座
一、開式の辞
一、修禊
一、降神
一、一献
一、祝詞奏上
一、清入の儀
一、玉串捧礼
一、撤
一、昇
一、閉会式
一、退会挨拶

井田さんからの手紙

(二本松寄贈者の二子孫)

秋たけなわの今日この頃、貴高等学校、双松会、ますます御清栄の御事と御慶び申し上げます。さて、本日は双松の松くい虫被害について手厚い御手紙頂き恐縮致しました。勿体ないよう

二本松への訣別と新生の大会に

会長 柴田 午郎

赤山で学んだ者に、深い精神的影響を与えてくれた二本松が、松喰い虫にやられたことは、まさに青天のへきれきにも似た感を抱かざるを得ません。これについては大分前から校長

式詩

二本松の一本枯るるを哀傷ひ
若松の剛きゆかむことを乞ふ新む歌一首 井せて短歌
木霊よ

二本の松こそたてれ すがしくも赤き丘の上
一本はま直なる樹容 一本は傾きたる樹姿
一年にみどり豊けく 二年に幹の太し
枝をよみ交はし 和ぎ睦み生ひて茂るを
時世経て晴ひきけり 五百歳の千歳の榮

われわれの双松会は二本松だからこの名前があるであって、一本になつたらどうするか、などと意地悪い質問を出す人もありますが、かりに暫く一本の時期があつても、新しい二本松を期待して、われわれ同窓会の名は、あくまで「双松会」で一向構わぬと考

「木霊よ」遺聞

「詩」は、在りし日の姿を偲びつつその事蹟を叙べ、心情を述べつつ鎮魂を祈る「詩」を、長歌に詠じた形になりました。この歌に作者の感慨体験が滲むとして、これは畢竟集団のおもいをあらわした歌です。そこで古例に則り、式典に「誦人しらす」としたところ、まるで匿名の投書、夜盗の類被りのごとし、とさんざんでした。

二本松の由来

松中四十六期 田平 式

二本松を伐るの青春時代の思い出をもぎ取られる思いだ。とは斧入れの時、柴田会長の言葉だった。枯らすま

松江中学校が殿町から赤山に移転することが決定した時、買取予定の藩士塩野家の屋敷に松の木が二本あった。

校舎が竣工して、学校は明治三十年六月移転したが、運動場の整備が完了したのは三十三年度だった。

二本松の思い出

松中四十九期 内田礼治郎

「古陵の松柏天鵬に吹ゆ……」谷口為次先生に教わったこの詩を吟ずる時、いつも脳裏に浮かぶのは、赤山にそびえ立つ大双松の姿である。

昭和2・10・19、本県下初の首相となられた若槻礼次郎氏のご帰郷の際、母校たる松江中学を訪問なされ、大講堂にて全校生徒に感動的な訓話をなされた。

平素の生徒集会はいつもの二本松下で行われたが、田中校長、谷口先生(生徒監)方が石段上に立たれて、声高らかに質実剛健を基調とする訓辞や諸注意をなされた思い出も今なお忘れられない。

二本松の由来

松中四十六期 田平 式

二本松が双松ともよばれて、赤山精神のシンボルとなったのは、西村房太郎校長に負う所が大きい。明治四十年から大正九年千葉に転出するまで校長として十三年余、明治三十三年東京帝大を卒業して着任以来、足掛二十年の長期にわたり、戦時戦後の困難な時、

西村校長は「回顧録」の中で「松中の生徒は概ね頭脳が緻密、着実勤勉で、開校以来学校騒動は一回もなく、指示通り実行してくるので校長としてやり甲斐がある。ただ強いて難を云えばおとなしい代りに稍氣力がなくて消極的だから、この点を矯正すれば鬼に金棒で、何処に出してもよい。郷土の俊傑山中幸盛を師表として、武道や各種運動を通じて生徒の心身を鍛え、二本松を「質実剛健」の象徴とした「赤山健児の歌」を歌わせ、学校の重要行事はこの下で行い、生徒に気合を入れて校風の確立に努力した」と述べている。

当時生徒の風紀取締り担当であった上級生による「矯風会」十二名のメンバーが列立していかめしく見下し、厳しい通告、叱責等をしてヤンチャ盛り

二本松の思い出

松中四十九期 内田礼治郎

各期卒業生の松江集会は先ず双松の下に参集、顔合せの上行動開始が恒例の様であるが、正にわれ等の心の故里たるにふさわしい存在であった。

私達の近畿双松会が毎年発行する会報の表紙は殆んど双松の英姿である。しかるに赤山原頭偉容を誇った二本の内、直立する一本が松喰虫に犯され、

が寿命として諦める外はない。在校生、卒業生のシンボルとして君臨して呉れた

双松、昔と今

松中五十二期 兼折 博

赤山に学んだ者たちにとって、双松は一種の「神木」だったという事になるのかもしれない。それも「神聖冒すべからず」といったものではなく、その樹下は何彼につけて生徒たちの相集う場所であったと共に、その巨樹は学園生活のモットー「質実剛健」の象徴として常に「仰ぎ見る」ものでもあったのである。だから赤山の学園生活は双松と共にあったというのが、卒業生たちのごく自然な思いではなかったかと思う。

そしてまた、殆んど校歌として愛唱された「赤山健児の歌」が、その冒頭は「朝暈直刺す雙松の」ではじまっていることも、双松を卒業生の胸深くきざみ込んだ一つの原因ではなかったか。卒業後、幾年、

幾十年を経ても、相集えば卒業生たちは必ずこの歌を歌う。だから双松は生涯にわたって常に心に反響する樹でもあって、歌うたびにこの樹容は青春の思い出と共につかしく心に浮ぶ、といったこともあったろう。だから他郷にあって稀に松江に立ち寄る人の中には、タクシーを走

二本松の思い出

松中五十二期 田辺 暉

五月二十二日(日)午後二時臨水亭(松江市末次本町十三番地)に於ける五三会昭和六十三年度総会開催に際し「赤山回顧録」を書く様案内致しました。

別紙紙会誌所載の如く会員一同、異口同音に「二本松の一本が切られたことは誠に残念である」と語っていました。昭和五十八年五月十五日、卒業五十周年記念大会を二本松台にて記念写真をとった時は緑潤る元気な姿を見ており、教頭先生が「大事に守って行きます」と言われた事が印象に残っています。

私の様に毎回役員会に出席したり、又孫が二人在学しており時々参上して状態を見ているものに付いては田原神社の松の木の様な前例としており、来

悔多き中に

松高二期 景山一功朗

樹林の中、赤茶けた老松が数本、無残な姿をさらす。「春日の森」は赤山と谷ひとつ隔てた至近の距離にある。「松くい虫。何としたことか」勃然とした怒りの中で、双松を氣遣う思いは、しきりだ。「あの松は大丈夫か。大丈夫だとも、」在校生・OB・学校関係者らが、折りに似て、ひとしく見守る双松である。「虫なんかやられてたままるのか」。

「まさか、あてはならないことである。」「どうも西側の樹勢が弱い」と聞き、やがて、「明らかに松くい虫に犯されている」と伝えられたのは昨夏のことである。種々、防除策は講じられていたのだが、「放っておけば隣りの一本が危い」は、誰の目にもみえていた。最悪の事態に直面、「被害木を伐ろう」、ほかに選択肢となく衆議は一決。だが、主だった地の双松会には事情の説明とお詫びを述べるのがルールである。秋、東京、近畿双松会の総会を機に、その席を拝借する。

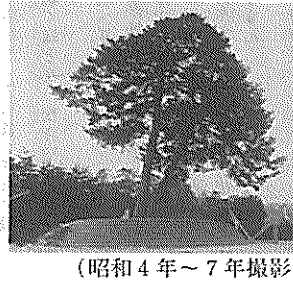
「管理に問題があったのでは」「東京での強い指摘も、双松への深い愛情を示すものと理解でき、関係者の一人とし、自らの一層の無力を知る。それにしても、何とかならなかったものであろうか。万が一にも防ぎ得るものならば、伐採のあの日の、あの名状しがたい動揺、参加者の方々の、あの無念とも哀惜ともつかぬ涙を見なくとも済んだ、のである。いま、わたしの掌に、ひとにぎりの木片がある。いうまでもなく双松のそれである。二百年の年輪を知る術(すべ)はないが、それは、文字通り膝下に育て、育ってきた少年の魂を知っている。

「二本松けつ別、新生式」での「木霊よ」は「悲しびて斧(おの)入れかねて若松や二本となりて行きませ」と万葉調の反歌を詠う。いまは、新しい若松に次代の象徴を期待する。

寄稿

二本松の思い出

松中五十二期 田辺 暉



(昭和4年~7年撮影)

赤山双松 吾等此の双松の下に五星霜養育されたのである。本日放課後二本松下に集るべしと鳩風会より通知来る。そしてこの朝会では此所にて各部の選手へた。又毎日朝会がありラジオ体操があった。近年に此の周囲を全部石垣にされた。依然として見える二本松



二本松の声

松中五十九期 池添 清見

旧臘十二日の二本松別・新生式に出席できず、居ても立ってもおられない二松へ電話した。そのとき聞こえた二本松の声を書きたくなった。

「池添君か、何時も僕の事を気にかけてくれて有難う。電話だったので長話は出来ないが、僕の話聞いてくれ。僕が百三十才の頃、この赤山台地に松江中学が殿町から移転して来た。爾來、僕は県内各地から集った優秀な生徒や、全国から赴任してこられた碩学の先生方から可愛がられた。

二本松とその伝統

松中六十二期 成瀬 恭

東京双松会会長の宇山厚氏から二本松が一本松になった経緯を詳しく幹事会でうかがい、一瞬一同声もなくなりました。しかし誰かが「形あるものは必ず滅す。しかし忘れかけられていた二本松の精神的伝統が、後世の北高生の胸に脈々と受け継がれる契機となるならば、かえってそれもよいではないか」と発言したので「そうだ。そうだ」ということになった。

二本松の精神的伝統というのは、○に十の字の一中をデザインして染めぬいた校旗と、明治四十年の皇太子行啓の機に校訓として決定された「質実剛健」の校風であり、大正七年に西村房太郎校長が自ら作詞された「赤山健児の歌」の三つを象徴するものであると思う。西村先生は本校に二十年近く在職され、十二年間校長を勤められた。「質実剛健」を象徴するものとして二本松を「双松」としてとり上げ、それをもって赤山精神とされたのも西村校長である。

赤山の土地の所有者であった塩野門之助氏が、県へ要請によって赤山を松江中学校の校地として売却した時、す

かに成長し、国家・社会のために有用な人材になってくれることであった。その願いは年々歳々見事に開花結実していった。立派に成長する生徒たちの姿を見ることは、僕の最高の喜びである。僕は松江中学と一心同体である、と自負していた。

戦後の学制改革で、由緒ある名門校松江中学は、松江一高・松江高へと転進して、この赤山台地から去って行った。万止むを得ない事情からとはいえ、惜別の情堪え難いものがあった。然し、僕は、後日必ずやこの地に帰って来てくれるであろうと確信していた。

確信的中して五十二年三月二十日、松江北高という晴れ姿で帰って来た。池添君よ、君たちが松中生としての誇りを持って来たように、北高生も立派な誇りと自信を持っている。そのこと

で二本松は数十年の歴史をもち、塩野家の愛惜惜められる家宝の銘木であった。したがって、塩野氏は土地を県に譲る時に、特にこの松の永久保存を条件としてつけたという。赤山に新校舎が完成して移転して来たのは、明治三十年のことであった。

その十年後に「双松」は「質実剛健」の校訓のシンボルとなり、さらに十一年たって勇壯な「赤山健児の歌」の歌詞と作曲が誕生した。英国の詩人ウィリアム・ブレイクは「偉大とは方向をあたることである」と言ったが、松江中学校(現在の北高)の校訓と校歌とそのシンボルとして二本松を選択したその創造者が西村房太郎校長であり、伝統の創始者であることは忘れてはならない。

西村先生には私の父も教わったが、私は戦後東京で初めてお目にかかった時、先生は私の顔を見るやいなや、健君だろうと父の名前を呼ばれた。昨年朝日新聞の夕刊にドナルド・キーン氏が「日本の日記文学」を連載していたが、あの共訳者金関寿夫氏も松中の先輩である。その金関氏が、校歌の歌詞の中にダンテの「神曲」から採

ったらしいフジがあると言っている。「靈光迷路の闇を射て、理想の里を照らすなり」という一節である。教養の深さが偲ばれるというものではないか。

が僕には、まらなく嬉しい。ところで、僕も二百三十才の高令になったし、僕の二世も成長期に入ったので、その榮養剤にでもなるうとの親心から、母なる大地に還ることにした。待ちに待った北高は帰って来たし、兼折校長以来、絶えて久しかった卒業生の目次校長を迎えることも出来たし、双松会員は勿論のこと、八十万国民待望の内閣総理大臣誕生も確認したし、僕は思い残すことはない。

双松会員の皆さんには長い間お世話になり、感謝している。訣別式に加えて、二世の新生まで祝っていただき、万感胸に満ちるの思いである。双松会各位と松江北高の弥栄を心から祈念する。

私は、思わず口ずさんだ。
“感無量嗚呼感無量二本松”

新生式経過報告

校長 目次 健一

二本松がこのような状態になりました。二本松をおおきく崩壊している者として深くお詫び申し上げます。ここ数年、特に山陰の海岸部で、小さい虫が狙撃つを極めております。しかし、二本松だけは守り通す、というのが松江北高の決意でありました。万全だと思える防護対策をとって参りました。しかしそれも及びませんでした。七月の末、一部の枝に枯れが出現した。松くい虫被害と診断されましたが、何としても部分枯れでくいとめようと必死の対策を講じました。松には無残と思える程、前後七回に及ぶ枯死の伐採や薬剤の樹幹注液を行いました。がいせん、病勢の進行を止めることはできず、十月末に遂に枯死症状と診断されました。

今、この台上から、赤山から二本松の姿が消えていくように感じることが誠に痛恨の極みであり、正に断腸の思いであります。

長い間、二本松を大事に守って来ただいた沢山の方々に感謝申し上げます。松江一中、松江北高の先輩校長・先生方、林業技術センター、特に周藤博士、松江森林組合の方々、それに二本松の症状を心配してたびたび赤山を訪れていただいた先輩方、何回も会合を開いて対策を協議していただいた双松会役員の皆様にお礼を申し上げます。

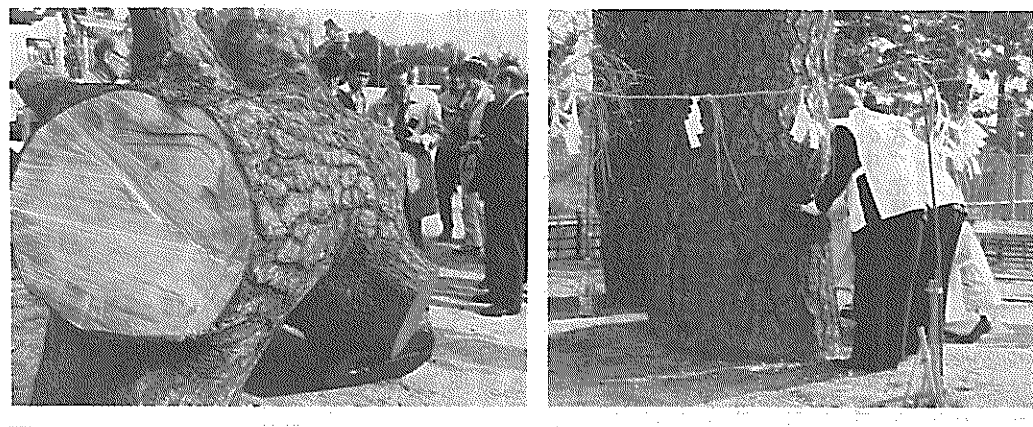
さて、二本松の一本を失なおうとしている今、是非卒業生、在校生の皆様におはかりし、ご賛同をいただきたいことがあります。それは後継二本松のことであります。

このことについては双松会とも十分に協議してのことです。幸い、幸いこの台上に、今、二本松の子ども、二年生・三年生の幼松が育ちつつあります。その幼松の中から新しい二本松を育てていきたいと思っております。

二十一世紀、二十二世紀、数百年の未来に向けて、新しい二本松を、苗から育てる、大変遠大な計画ではありません。しかし、一〇〇年の歴史と伝統を継承しながら、限らない未来に向けて一杯です。

しかし、私たち後輩には、この老松の下で生れた若松を立派に育ててゆかなければならない重大な責務があることを、今、あらためて痛感しております。本校の校訓である、質実剛健を、そのまま象徴する姿で、堂々とそびえ立っていた老松に負けない新しい松を、私たちの手で受け継ぎ、育てていかなければなりません。この若松は、二十一世紀に向けては、若者の象徴でもあると思っております。

今、ここに決意をあらたにして、この若松を立派に育ててゆくことを誓います。
昭和六十二年十二月十二日



「赤山健児」を歌う先輩方
於 ホテル白鳥

式を前にして校舎側より

収入総額	10,004,008円(利息を含む)
支出総額	4,940,397
内訳	
通信費(郵便代など)	1,574,980円
印刷費(案内状・礼状・式典しおり等)	459,800
伐採費(伐採処理・運搬費等)	1,003,050
会議費(役員会・全国大会等)	607,722
旅費(東京・近畿双松会)	229,160
人件費(雇員給料)	151,000
式典費	172,950
資料費(記録ビデオ作成等)	285,100
版替手数料	138,430
その他	318,205
合計	4,940,397
差引残高	5,063,611円

「募金、引き続き 受付いたします」
募金基準額二、〇〇〇円以上で、お願いいたしました。もしまだの方がありましたら、これからでもかまいません。暖かい御援助をお願いいたします。

「募金御協力に 感謝申し上げます」
北高の緑を守り育てる事業の基金については、その趣旨に御賛同いただき多数の方々から御心のこもった御資金を賜り、ありがとうございます。皆様方の御協力にたいし、心より感謝申し上げます。

「二本松別・新生全国大会 行事事中報告」
(昭和63年5月15日現在)

昭和六十二年十二月十二日

竹下登氏、首相に就任

昨年の十月末の中曽根自民党総裁(首相)任期切れに伴う政権交代で、竹下登氏(松江中学・六十一期)が自民党総裁に就任した。同氏は十一月六日午後、衆参両院の本会議で第七十四代、四十六人目の首相に指名され、挙党体制の新内閣を組織した。本校からの宰相は故若槻礼次郎氏が昭和元年に総理になって以来、二人目のことである。

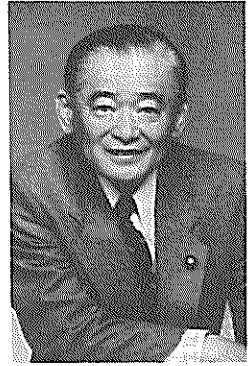
このたび、双松会の会報誌上において、一学友である私を含めたテーマで特集が掲載されると聞き、大変恐縮すると共に光栄なことと感じております。私は、昭和十一年の春、松江中学(旧制)に入學しました。同じ年の二月には、東京で「二・二六事件」が起こるなど、時代は次第に厳しさを増していきましたが、島根県内はまだ自由でのびのびとした空気が残っていました。

特別寄稿 "松江中学時代"の思い出

竹下 登

入學と同時に、私は「成始塾」に入塾し、十二畳ほどの一部屋に五人同室となつて、かなり厳格な規律の下で寄宿舎生活を送ることになりました。

そのような寮生活の中でも、上級生の中には出入り禁止の映画館や喫茶店にこっそり出かけたり、門限を過ぎてから、ひそかに寮を抜け出して「うどん」を食べて行く猛者もいて結構楽しい毎日でした。



私は、一年の時から柔道部に籍を置き、自分としては真剣な稽古を続けましたが、時には深夜にもかかわらず、道場にもぐり込み友人と乱取りなどの猛練習に汗を流したこともあります。

一枚の写真

松中六十二期 佐々木 魁

親族や親しい友達等の来訪をうけ、話が弾み出すと、古ぼけたアルバムを持ち出すのが癖になってきた。既に表紙はボロボロになっている。それだけに中の写真も古く、昔のものとなった。古い昔のものだけに、なつかしさも亦ひとしおであり、おのずと話の花は咲く。

このアルバムに、赤茶けてきたが、中学生時代の一通の頁がある。花瓶のあるテーブルの傍らの中学生。電気スタンドと書物の側の中学生。パレートのネット、ボール、そして校章の校旗等をアレンジした背景に、一段とアップして写し出されたスポーツマンの中学生。(当時流行のいわゆる芸術写真である)下宿屋の二階から五、六人の悪友共が、思い思いのポーズで撮ったスナップ写真。マントの襟を開けたままの生意気な中学生。そして又、柔道衣の道衣の猛者達等々様々である。それらの一枚一枚から写真の主は、今も元気に、当時の中学生のままの姿で話しかけてくる。先輩は叱咤激励して下さる。これに込められている、いつしか

紅陵の光と影

松中六十一期 柏木 侑

ふざけあって過ぎたこともある仲間が日本の総理になったのだ。片や浪々の身で一家の長の座さえも老妻に責められて危うい者も居るといふのに、ふりかえってみると少年の頃のあのしさ、この発意、処理の仕方、政治家として大をなす胚芽があったかなあと、思い当たるところもないでもない。五年生の頃は、下宿が近く、共に柔道をやり、亡弟もまた近くいて、一緒に過ごす時間が多かったからか、一人子の彼はがらくたの私達に興味を持ったのかもしれないが、格別な仲間として生活した奇縁の一年間であった。兩来家族的なつき合ひまでいたっている。夏季小旅行で横田町の鳥上山へ泊旅行をした帰り、竹内宇、山岡昂、私たちが掛合の空、奇り教日をおかあさんの唯

タイムトンネルは赤山時代に舞い戻るのである。その中に竹下登君の写真がある。



松江中時代の友人たちと(後列・右端) 竹下登首相(前列・左端) 松江市内の普門院で

写真の背景は白く、何も写っていない簡素なものである。写真の主は、起立しているが、不動の姿勢ではない。でも楽に休め、と言った姿勢でもない。やや斜めから撮った自然体とも言った姿である。帽子をかぶっている。中の字の帽章は額の真中に位置しているが、全体としてやや斜めに傾いている。帽子の天上は後方に撫でながらかぶったのか、スタイル形成を作為した気配が感じられる。制服の上衣は短く、上衣の下端からベルトのバックルが判然と写っている。ベルトは特製か？スポンの裾は写っていないので、ラッパズボンかどうかは定かではない。

松中六十三期柔道部

池田 幹

昭和十三年、私は松江中学校に入つた。汽船通学をしていたが、親戚が北堀にあつて下宿することになった。五十米の距離に竹下さんの下宿があり奥谷には門脇さんの下宿があり、二年上級の二人と知り合い私は柔道部に入つた。我が柔道人生の始まりで一生柔道を通じての運命となった。卒業後も諸々の指導をうけ交際が今日まで続いている。

勿論柔道は放課後で、一年から五年まで八十名前後の部員で練習が行われ、下級生は上級生にお願いして稽古をつけてもらう習性があった。礼に始まり礼に終る言葉通りだった。投げられて、又投げられて手杖杖腰杖それぞれ得意技で痛みつけられ、その都度杖を覚えて行く受身も上手になる、絞められ苦しみから逃れようとして逃げ方を覚える、関節をとられ痛い、抑えられ動きがとれない、何とか起きたい、退出が出来ない苦しみ、連続だ。そうこう耐えている間に何とか活路を見出す、然し苦しみの連続だった。

竹下さんは毎日放課後道場に姿を見せた。稽古も柔軟で派手な稽古ではなくてこつこつと木を磨いて行く地味な努力と精進の結晶だった。柔能制剛の精神で理論的柔道で、従って立枝よりも

じ位で、五尺三寸そこそこの小兵であった。柔道部に籍を同じくしたよしみで、稽古には共に励んだ。乱取りでは夏の日も、冬の日も、汗と油を出し合い、今も主の胸の温みを感じる。入部当初は枝柄も伯仲だったと記憶する。然し後年は、主の内股、跳ね腰、巻込みの枝には歯が立たなくなり、常に投げられる結果となった。あの枝の力はどこから出たのであろうか、これだけはこの写真からは想像も出来ない。飯石郡のねずみと隠岐の島の猪の取り組み合いで、ねずみも多分に手傷を負ったことだろう。猪は何分にも猪突猛進、我武者羅の性著しかったから。そしてその猪は遂に同郷先輩部員に眼を付けられ、特別指導をうけることになり、衆人監視の中で、山根先輩による徹底的絞め技で「落される」破目になった。

寝枝の方に興味があった。研究熱心な人で下宿に帰って時折実演が始まる事も多々あった。参考になった。

先生は落合幾造六段で古武士の風格を供えた柔道家で、今は天倫寺の一隅に眠っておられる。道場は県下随一を誇る百二十畳の大道場で、入ると諸先輩の賞状が一面に飾られ伝統の重みを感じた。

昭和十五年は記元二千六百年に当り竣工式が催され、同時に先輩と現役の親睦柔道大会が開かれ、竹下さんは中堅として出場し、巨漢田部部長右衛門三段(元知事)と対戦し引分けに持ち込み、現役の態勢を導き結果として引分となった。尊厳振りが偲ばれる。又昭和十五年から県大会は戸外道場が試合場となり、野球場に畳を敷き開催された。試合は一部と二部とに分れ、一部は四年、二年、二部は三年以下で五名宛善戦の結果、一部は準優勝、二部は優勝した。この時の私は二部の大将として出場し栄冠を手にした。開校以来初の優勝で喜ばれた。竹下さんは選手兼マネージャーとして出場貢献された。

又昭和五十七年講道館国際柔道スポーツセンター建設に当っては、政界人として竹下さんの御盡力絶大なものがあり、講道館より高く評価されている。幸い現館長嘉納先生を案内し竹下さんにお会い出来て非常に嬉しかった。良き思い出として大切に柔道と共に私の胸の奥にしまっておきたい。

63年度県高校総合体育大会
男女総合、第四位 一上位入賞にあと一步

Table of sports results for the 63rd Prefectural Comprehensive Sports Meeting, showing rankings for various categories like swimming, badminton, and tennis.

今年の総合体育大会は、前期は六月三日から六日、後期は十日から十三日まで、松江、出雲、浜田、益田を中心に開催された。本校からは、総勢五二〇名の選手団を送り、昨年までの雪辱を期した。結果は男女総合四位に終わった。特に活躍が顕著だったのは、バドミントン部の男女ともに団体戦で準決勝まで進出したこと。剣道部の女子団体二位、男子三位。漕艇部男子総合一位、女子総合一位。陸上部男子総合三位、女子総合一位。ソフトテニス部、男子三位、女子二位。バレー部、男子五位、女子三位。バドミントン部、男子三位、女子二位。ソフトテニス部、男子五位、女子三位。バレー部、男子五位、女子三位。バドミントン部、男子三位、女子二位。

今春の進路状況

国立大学の受験機会の複数化二年目の昭和六十三年度入試は、前年度、大量の第一段階不合格者(足切り不合格者)を出したこともあり、再び自己採点方式が復活することとなった。その結果、受験生の出願が慎重となり、各公立大学とも得点分布が高目に移動した。また国立大学の入試改革の影響が私立大学の入試にも大きな影響を与えた。特に中堅校と呼ばれる大学に志願者が殺到している。学部別では経済、経営、商、社会学部系統の人数が高く、各私大とも激戦りとなった。そのような状況の中で、我が北高は、私立大学に関しては、自己採点をしたうえで国立大学が複数受験できたこととあり、合格者総数は減ったものの現役を中心に健闘している。また国立大学においても、東京大学七名、大阪大学九名、神戸大学十三名、広島大学三十九名等々多数の合格者が出た。

あゝ山本幡男君

松中46期 田平 武

二十八年後半からは有志が一人つきつきり、排膿は次第に多くノドの激痛を訴え続けるようになった。病床にあってから一年半、二十九年の夏には再びは絶望と思われ程衰弱したのを外語の先輩で満鉄で上司だった横濱の佐藤健雄氏が、それとなく遺書を書くよう勧めた。幡男君はこの先輩の言葉に微かに頷いた。遺書はつぎの悲痛な絶叫で始まる。山本幡男 謹白

昭和62年度進学状況学校種別 (昭和63年4月集計)
Table with columns for school types (National, Public, Private, Short-term, Others) and years (1960, 1961, 1962, 1963), with sub-columns for current and total counts.

旧制松江中学出身で宗教家の立場から、一生を世界平和運動に力を注がれていた今岡信一良翁が、百六歳の尊い生涯を全うし、四月十一日逝去された。惜しまれなければならない。翁は、明治十四年斐川町に生まれ、三十三年松江中学を卒業、熊本五高を経て三十九年東京帝国大学文学部で卒業された。東京帝大文学部で、宗教学主任教授嶋崎潮風先生の副手をつとめ、大正四年ハーバート大学に留学、哲学・神学を学び、その間自由で進歩的なキリスト教の感化を受けた。帰国後大正八年日本大学文学部講師となり、十四年から半世紀にわたって、東京港区の私立正則学院中学校長、高等学校長・理事をつとめる一方で、昭和二十三年には、宗派を超えた日本自由宗教連盟の創設に尽力され、以来会長・名誉会長を歴任、二十五年にはキリスト教を母体とする、国際自由宗教連盟に加盟、世界宗教者平和会議の創設、参加、同会議の日本開催にも蔭の力となつて大きく尽力された偉大な人物であった。私と翁の出合いは、昭和五十四年翁の義父でもあった山陰社会事

早いものだ。長男の頭。右は東大に進学、もしみさんは自宅通勤が出来よう二十八歳から移り住んでいた。遺書を暗記して大宮にいる奥さんに届けるのだ。そして「アムール句会」から吉賀、新見、佐藤の三氏のほか後藤、山岸、山村の三氏が十五頁にわたるびびり書きの遺書を一字一句まちがいに暗記するのは容易ではない。監視の目をくぐって必死の努力だった。それは単なる同情や友情で出来ることではない。幡男君の人格に對する無限の尊敬がそうさせたのである。これこそ我々の代表的遺言、若い自分に万一のことならば自分もこうした遺言を残して行きたいこの一念があらゆる危険を犯し、遺族まで届けられたのだ。幡男君は遺書を書いて一ヶ月後、八月二十五日午後一時三十分ハバロフスクの収容所で四十五歳の生涯を終った。遺書は「山本幡男の遺族の者よ!」ではじまり「到頭ハバロフスクの病院の一隅で遺書を書かねばならなくなった。鉛筆をとるも涙。書き綴るも涙。病床生活一年三月月衰弱甚しく筆も意の如く運ばず、唯無言の涙、抱擁、握手によって辛うじてその一端を現わし得るに過ぎないであろうが、ここは日本を去る数千軒、どうしてそれが出来るようにといたす家族の健康を祈り、子供達が成長して、社会の為文化進展に役立つように生活が向上し一家が幸福なることを祈り、これが私の最重要な遺言です。」ここで前文は終り、つづいて「お母さまへ」と何一つ期待に添えなかつたことを詫言ひ飽き強く生き妻と孫たちの成長に協力して欲しいと切願したあと妻の「お母さまに呼びかけ、一妻よ!よくやった。実によくやった。この十年間よく辛抱し努力し続けた。殊勲甲、超人的な仕事だ。私が恥しくなつて来た。四人の子供と母を養って来ただけでなく中学、高校、大学へとそれぞれ進学させていったその辛苦、郷里から松江、大宮へと三遷の如く、お前はよくまあ転々と生活再建子供の教育の為に運命を切り拓いたものだ。一目でいい。会って胸一杯感謝の言葉を云いたかった。どうか子供等に

約八十年前のこの旅行のことを思い出し、道連れであった親友の天死を悲しみ、岡山駅頭における行きませりの紳士の小さな親切が限りなく尊まられる。そして「旅は道連れ、世は情け」という日本人の知恵の言葉の真意が今更のごとく痛感される。と書き添えられた。心から翁のご冥福をお祈りし筆をおく。(松江市社会教育委員)

死を惜しむ 山本直治
今岡信一良翁の
死を惜しむ
山本直治
今も心の糧とし、大事に掲げているが、松江中学を卒業したばかりの信一良少年が親友の渡部寛得と共に、二日間の徒歩旅行の後岡山駅に着いた。山口市で開催の中国・九州ブロック学生Y M C Aの研修会出席のためだった。岡山駅で三田尻までの乗車券を買おうとしたところ、二人の財布をどんなにはいたしても、十銭不足することに気がついてハタと困った。ところが寛得少年は気転を利かし駅頭の紳士をとらえ、実状を訴えて大枚二十銭也を獲得したので、発車間際の列車に飛びこみ三田尻に着き、二十キロの道程を徹夜の徒歩で山口の会場に無事辿り着くことができた。

定期大会

松中五十九期

高濱 章

五十九期同窓会

五月二十二日(日)午後四時より京都嵐山の教職員共済関係厚生施設、瀬多橋河畔の「花の家」にて、六十三年度の総会を開催す。

当日は前夜来の小雨のけがる日本画墨絵のような、西山に白雲停迷する風情のある嵐山にて、東京・松江方面からも馳せ参じて、在阪者を中心に総勢十六名、久瀨を叙し、互いの健康を嘉

松中六十一期

小村 健

同窓会

昭和十六年の春の卒業以来、何度同窓会を開いたか、数えきれない程であるが、先般の同窓会ほど盛り上がった会はなかった。

卒業以来初めて見る顔が数名、約五十名の初老の紳士が、皆心から嬉しうに、ニコニコ顔で集まってきた。こんな嬉しそうな顔は見たことが無い、だれも心から嬉しいのだ、我々の同級生から『日本の総理大臣』が生まれたのが、本場に嬉し

しいのだ。六十一期の末席に連なっているという事だけで、何か自分も偉くなったような錯覚すらおぼえる。



竹下総理誕生祝賀同窓会

昨年の秋以来『竹下総理』と同級生です、と何度と様々に告げたことやら、そしてひと様から羨望のまじったホーと言う返事を聞くたび、ああよかったです、と自分の事のように喜ぶ、まずはおめでたい限りである。そして決して増えることのない六十一期の皆さんが、だれも健康で長生きされん事を祈ります。又集まろうではありませんか、何

松高八期

米澤 直行

卒業三十周年記念同窓会

我々松高八期生六三〇名は、昭和十二年の春、西川津木造校舎を築立ってから三十周年を迎えました。



松高八期卒業三十周年記念同窓会

北高十三期

安原 正 臣

一期生の会

昭和三十四年入学、同三十七年卒業の私達は、松江高校としては最後の入学生で、在学中に北高と名称が変更同時に南高も発足したので、卒業は一期という歴史的瞬間を経験した価値ある卒業生なのです。正しくは新制十三期の事です。

さて、その自称北高一期生が西川津の学舎を築立って以来二十五年ぶりに再会したのです。昨夏旧盆の中日、穴道湖畔のホテル白鳥の大ホールに、よくぞ集まったり二百余名!!

三年次の担任だった加納先生、松本先生(幹事)、塩田先生、林先生、田中先生と母校からは校長の目次先生をお招きして延々四時間半、それでも名残の尽きぬ大パーティーでありました。

実はその前年十月に、予行演習ならぬ二十四周年の集いを地元男性だけで催したのです。この時駆けつけてくれたのが七十余名、それですっかり意を強くした事もありましたが、当日『オナゴは』で来んやア』とか『盆や正

月ならもって集まりでエ』という出席者の声に励まされて、それじゃ一丁全員に声をかけて派手にやってみようという事になった次第です。呉漁連の岸君を幹事長に、各R代表の世話役、総勢三十数名の打合せ会を五、六回催し、その前後にミニ幹事会を開いたりして準備を重ねました。

いよいよ当日、予想をはるかに越える出席者の列に幹事一同感謝ノ感激ノBSSの栗原君が厳かに開会を告げる。恩師のユーモア溢れるスピーチ、校長先生の近況報告、旧校舎のスライド投影と続き、乾杯と共に二十五年の断絶が一気にほぐれ、正に宴たけなわ。部活の集団、グラウンドストア派、補習追試組、早期喫煙の友等々のグループがそここちに出て来て話に夢中のあまりせ

つかの料理や酒が余る程でした。会費の一部と当日会場でカンパして集めた『松喰虫防除基金』十六万円余を母校に捧げる事を満場一致で決め、和氣諸々の交歓の後、『山脈浮びて』の校歌を全員で高らかに唱い、盛況裡に再会を約してお開きとなりました。

北高十三期同窓会を開いて我々二十三年は母校の北高を卒業して以来十七年程経ってはいませんが、けっとう連絡が良く毎年同窓会を開いておられます。それも全員に案内を出して同期会として開きます。昨年もお盆の十三日に開き、五十名程ではありましたが開きました。夏の夜に楽し

松高九期

小林 忠 夫

30周年記念同窓会

梅雨の候、皆様如何お過ごしでしょうか。思えば卒業30年は実に早いものでした。その間、実社会で、あるいは御家庭で、益々、御活躍のことと存じます。

さて、そこでこの30周年を記念して全国各地で活躍中の同期生が一堂に会し、盛大に同窓会を開くことになり、皆様には、各人宛、過日案内状が送付してあります。紙面を借りて、御連絡を申し上げます。

尚、今回は恩師をお招きし、盛大にこの会を催し度いと存じますので、是非とも御出席下さいませ御案内申し上げます。

日時 昭和63年8月13日(土) 16時集合 16時30分写真撮影 17時開宴

場所 ホテル一畑(松江市千鳥町) 会費 老万円(全員振込みにて) 連絡先 世話人代表 小林忠夫 松江市上乃木町二〇三九一三 〇八五二二二一三二一

ルーム幹事 渡部節子・岸(寺津)治子(1R) 杉山徳子・川原(勝部)昌子(2R) 石橋松枝・星野(米田)容子(3R) 森脇通友・小玉(岩崎)好子(4R) 岡榮二郎・安田昌子(5R) 前田勝彦・寺本昌世(6R) 石上欽也・高木幹一郎(7R) 杉谷雅祥・永業義人(8R) 妹尾道雄・原田(倉内)陽子(9R) 松崎健二・佐原 巨(10R) 酒井重礼・田村京子(11R) 米田充男・松村義邦(12R) 安田(後藤)禎恵・中島修子(13R)

事務局長(校内幹事)の転出入 昭和六十三年四月の人事異動 転出 野津 隆(教)高7期大社高へ 岡坂 晴朗(体)高8期出雲高併定へ 林 満(英)高17期安来高へ 転入 西尾 辰郎(社)高10期松江商から 泉 雄二郎(理)高26期益田高から 津森 敬次(社)高30期新任 石川まゆみ(英)高30期横田高から 諏訪部 淳(体)高35期新任

編集後記

小林 忠 夫

「双松会」会報第九号をここにお届けします。今回は特集号を組むことになりました。多くの方に原稿を依頼したところ、御多忙の中、引き受けていただくことになりました。また「二本松」の思い出を語りたという事で、自ら寄稿して下さい方もありました。お礼を申し上げます。

昭和六十一年は双松会にとっては「竹下首相誕生」、「二本松別冊新生式」という大きな出来事がありました。十二月十二日に訣別、新式式が挙行されました。二月十三日に弁入式が行われ、多数の生徒が見守るなかで、伐採されました。生徒の心にも感慨を残しました。残り一本の松の周囲には新生の松が幾本も植えられています。すくすくと生長し、再びその雄々しい姿を仰ぎ見る日が来ることを願っています。

若槻内閣が発足した時、日本は世界情勢の中で重大な岐路にたたされ、将来の進むべき道の選択がせまられていました。現在は、経済問題を中心に日本がいかに国際社会で進むべきか、貢献すべきか、問われています。それだけに竹下内閣に期待するものは大き

いように思われます。竹下首相の御健勝と御活躍をお祈りしたいと思います。一層の紙面充実を計りたいと思っております。何でも結構です。気楽にお寄せ下さい。

双松会副会長 森脇善夫氏(松中45期)昭和六十三年二月十三日 御逝去されました。謹んでお悔み申し上げます。

事務局長(校内幹事)の転出入 昭和六十三年四月の人事異動 転出 野津 隆(教)高7期大社高へ 岡坂 晴朗(体)高8期出雲高併定へ 林 満(英)高17期安来高へ 転入 西尾 辰郎(社)高10期松江商から 泉 雄二郎(理)高26期益田高から 津森 敬次(社)高30期新任 石川まゆみ(英)高30期横田高から 諏訪部 淳(体)高35期新任

事務局長(校内幹事)の転出入 昭和六十三年四月の人事異動 転出 野津 隆(教)高7期大社高へ 岡坂 晴朗(体)高8期出雲高併定へ 林 満(英)高17期安来高へ 転入 西尾 辰郎(社)高10期松江商から 泉 雄二郎(理)高26期益田高から 津森 敬次(社)高30期新任 石川まゆみ(英)高30期横田高から 諏訪部 淳(体)高35期新任

事務局長(校内幹事)の転出入 昭和六十三年四月の人事異動 転出 野津 隆(教)高7期大社高へ 岡坂 晴朗(体)高8期出雲高併定へ 林 満(英)高17期安来高へ 転入 西尾 辰郎(社)高10期松江商から 泉 雄二郎(理)高26期益田高から 津森 敬次(社)高30期新任 石川まゆみ(英)高30期横田高から 諏訪部 淳(体)高35期新任

事務局長(校内幹事)の転出入 昭和六十三年四月の人事異動 転出 野津 隆(教)高7期大社高へ 岡坂 晴朗(体)高8期出雲高併定へ 林 満(英)高17期安来高へ 転入 西尾 辰郎(社)高10期松江商から 泉 雄二郎(理)高26期益田高から 津森 敬次(社)高30期新任 石川まゆみ(英)高30期横田高から 諏訪部 淳(体)高35期新任

事務局長(校内幹事)の転出入 昭和六十三年四月の人事異動 転出 野津 隆(教)高7期大社高へ 岡坂 晴朗(体)高8期出雲高併定へ 林 満(英)高17期安来高へ 転入 西尾 辰郎(社)高10期松江商から 泉 雄二郎(理)高26期益田高から 津森 敬次(社)高30期新任 石川まゆみ(英)高30期横田高から 諏訪部 淳(体)高35期新任

事務局長(校内幹事)の転出入 昭和六十三年四月の人事異動 転出 野津 隆(教)高7期大社高へ 岡坂 晴朗(体)高8期出雲高併定へ 林 満(英)高17期安来高へ 転入 西尾 辰郎(社)高10期松江商から 泉 雄二郎(理)高26期益田高から 津森 敬次(社)高30期新任 石川まゆみ(英)高30期横田高から 諏訪部 淳(体)高35期新任

事務局長(校内幹事)の転出入 昭和六十三年四月の人事異動 転出 野津 隆(教)高7期大社高へ 岡坂 晴朗(体)高8期出雲高併定へ 林 満(英)高17期安来高へ 転入 西尾 辰郎(社)高10期松江商から 泉 雄二郎(理)高26期益田高から 津森 敬次(社)高30期新任 石川まゆみ(英)高30期横田高から 諏訪部 淳(体)高35期新任

事務局長(校内幹事)の転出入 昭和六十三年四月の人事異動 転出 野津 隆(教)高7期大社高へ 岡坂 晴朗(体)高8期出雲高併定へ 林 満(英)高17期安来高へ 転入 西尾 辰郎(社)高10期松江商から 泉 雄二郎(理)高26期益田高から 津森 敬次(社)高30期新任 石川まゆみ(英)高30期横田高から 諏訪部 淳(体)高35期新任

事務局長(校内幹事)の転出入 昭和六十三年四月の人事異動 転出 野津 隆(教)高7期大社高へ 岡坂 晴朗(体)高8期出雲高併定へ 林 満(英)高17期安来高へ 転入 西尾 辰郎(社)高10期松江商から 泉 雄二郎(理)高26期益田高から 津森 敬次(社)高30期新任 石川まゆみ(英)高30期横田高から 諏訪部 淳(体)高35期新任